

# 須恵器・椀に関する基礎研究

—生産地を中心に—

小池 寛

## 1. はじめに

須恵器の編年的研究は、大阪府泉北丘陵に点在する陶邑古窯址群の発掘調査により飛躍的に進展し、微細な点においては検討する余地を残しているが、ほぼ確立したと言っても過言ではない状況にある。また、各器形の消長変化についても、基礎資料の緻密な検討により、概ね把握されるに至っている<sup>(注1)</sup>。

この陶邑古窯址群において所謂、TK73併行期よりも先行すると考えられる大庭寺・伏尾遺跡が発掘調査されたのが1986年のことである。この調査成果の公表により、初源期の須恵器の動態が把握されたばかりでなく、陶質土器が須恵器へ及ぼした影響についても、今まで以上に明らかにされた。

著者は、かつて朝鮮半島の陶質土器・盃について集成を行ない、その出現と終焉時期について把握し、各地域の様相を概観したことがある<sup>(注2)</sup>。

本稿は、それらを念頭に置き、須恵器・椀の生産段階における動態を整理するとともに、陶質土器・盃との比較により椀の出現期の状況についても言及することを目的とする。

## 2. 陶質土器・盃の概観

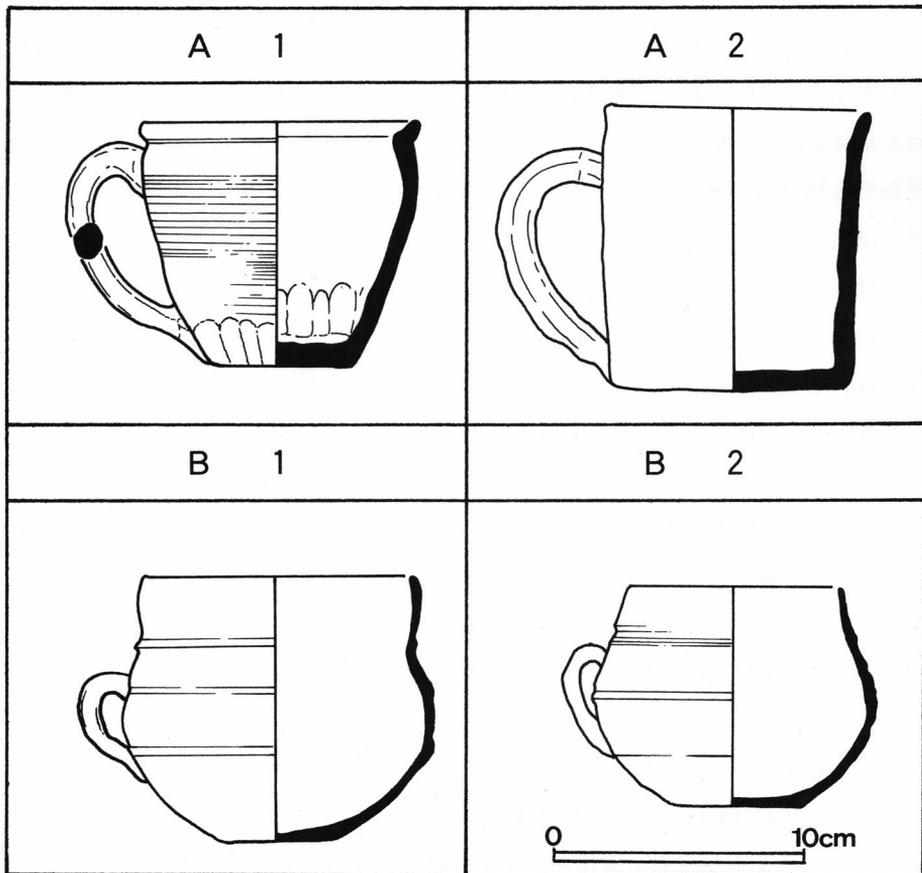
朝鮮半島の陶質土器研究は、多くの墳墓調査により飛躍的に進展している。が、生産遺跡の調査が極めて少ないことから、生産段階における一括性が把握できないのが現状である。また、地域毎に比較した場合、各地の調査件数に大きな隔たりがあり、編年及び分類に精粗が生じ始めている。

そのような状況にあって、陶質土器・盃の編年的研究は、副次的に対象とされたことはあったが、ほとんど見られないのが現状<sup>(注3)</sup>である。

著者は、このような研究の現状を踏まえ、馬山・釜山・金海・陝川・昌寧・大邱・慶州・蔚州・義城・百濟地域出土の盃を概ね集成し、器形的変化を概観したことがある。以下、本稿に必要な研究成果について概述しておきたい。

先ず、盃の分類については、所謂「ジョッキ形」を基本的な型式とするA類と胴体部が球体を呈し、直立する口縁部をもつB類に分けた。更に、釜山周辺地域に多く見られ、なおかつ、特徴的な型式としてC・D類を設定した。この分類は、盃の型式がバラエティーに富んでいるため代表的型式として認識し、更に、各型式の中においても、特に、A類・B類を中心に各地域の動態を細分化して把握した。A・B類各々の出自については別稿に譲るが、各地域のA類及びB類の出現時期及び分布などについて概述しておきたい。

馬山地域では、縣洞古墳群<sup>(注4)</sup>に盃の類例が多く見られる。基本的には、5世紀中葉に至るまでA類が主流をなしており、5世紀前半の同48号墳においてB類が出現する。しかし、B類は、同古墳群において、僅かな出土例であり、A類からB類への明白な移行時期とは認識できないのが現状である。一方、出土例が最も多い釜山地域では、華明洞古墳<sup>(注5)</sup>におい



第1図 陶質土器・盃型式分類(A・B類)

- A1. 釜山 華明洞古墳表採      A2. 馬山 縣洞18号墓  
 B1. 慶州 味鄒王陵1-C墓      B2. 慶州 味鄒王陵1-G墓

付表1 陶質土器・盃A・B類消長表

| 年代  | 馬山       |          | 釜山        |         | 金海       |          | 陝川         |           | 大邱寧昌          |              | 慶州         |          | 義城           |            | 百濟          |            |
|-----|----------|----------|-----------|---------|----------|----------|------------|-----------|---------------|--------------|------------|----------|--------------|------------|-------------|------------|
|     | A        | B        | A         | B       | A        | B        | A          | B         | A             | B            | A          | B        | A            | B          | A           | B          |
| 4世紀 | ● 縣洞41号墓 |          | ● 華明洞古墳   |         | ● 禮安里31号 |          | ● 玉田6号墳    |           |               |              |            |          |              |            | ● 清州・新鳳洞古墳群 |            |
| 5世紀 | ● 縣洞8号墓  | ● 縣洞48号墓 | ● 五倫台25号墳 | ● 府院洞A区 | ●        | ●        |            | ● 漆谷郡深川洞  | ● 漆谷郡多富洞1・B号墳 | ● 月城路力11・2号墳 | ● 味鄒王陵1・C墓 | ● 塔里洞古墳群 | ● 安東・馬洞1・2号墳 | ● 扶安・竹幕洞遺跡 |             | ● 月松里・造山古墳 |
| 6世紀 |          |          |           |         | ● 禮安里19号 | ● 禮安里66号 | ● 倉里B100号墳 | ● 倉里A19号墳 | ● 伏賢洞1・59号墳   |              |            |          |              |            |             |            |

て4世紀前半に既にA類が見られ、B類は福泉洞39号墳<sup>(注6)</sup>に代表されるように5世紀前半に見られる。しかし、B類の出現によりA類の出土例が減少する傾向は指摘できるものの、五倫台25号墳<sup>(注7)</sup>のように5世紀中葉までA類の出土は確認されている。このことから、5世紀前半にB類の出現は認められるが、A類からB類への移行期は、それよりも以後とする方が蓋然性が高い。

金海地域では、禮安里66号墳<sup>(注8)</sup>においてB類が出現する以前は、A類が主流であり、5世紀後半に移行期を認定することができる。

狭川地域では、玉田・苧浦古墳群<sup>(注9)</sup>において、A類が主流を占める傾向があり、6世紀前半段階に築造された倉里A19号墳<sup>(注10)</sup>にB類の出現が認められる。

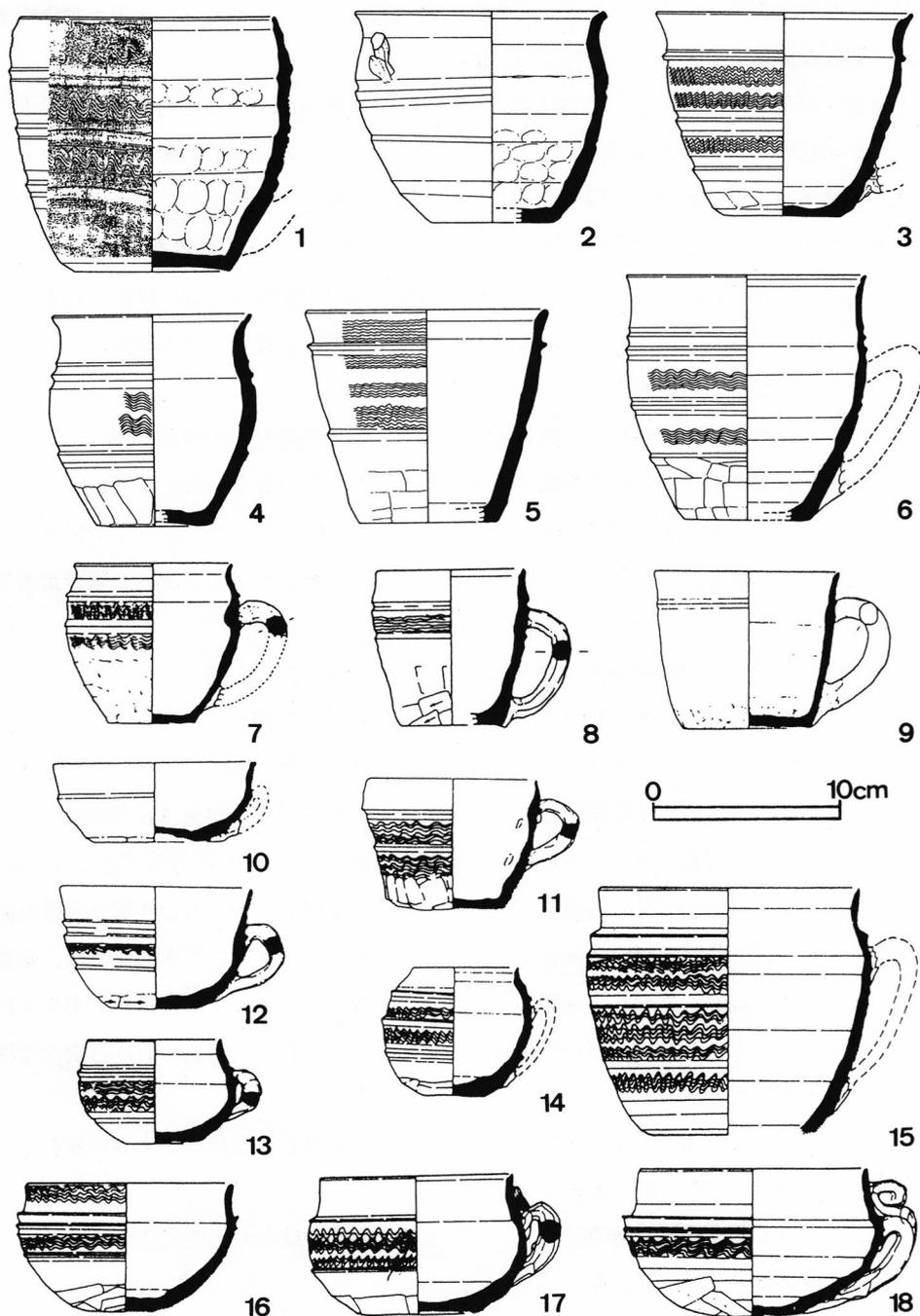
昌寧・大邱地域では、5世紀中葉にB類の出現が認められる一方、慶州地域では、味鄒王陵1-C墓<sup>(注12)</sup>で、典型的なB類が出土しており、釜山地域と同じように5世紀前半にB類の出現が認められ、A・B類の併存が長く認められる。なお、慶州地域において月城路カ14号墳に見られるように、5世紀中葉から後半にかけてA類は確認されるが、5世紀後半には、消失していることが認められる。

最後に、百濟地域について概観すると、新鳳洞古墳群<sup>(注13)</sup>においてA類が4世紀中葉に出現していることが認められるが、発掘調査の件数が僅かなこともあって、それに続くA類の良好な資料群は得られてはいない。なお単体ではあるが、日本・沖ノ島祭祀遺跡と同じ滑石製の祭祀具をもつ竹幕洞遺跡<sup>(注14)</sup>で5世紀前半に位置づけられる資料が知られている。一方、百濟地域におけるB類出土例は、永洞玉田里などで見られるよう6世紀前半に認められる。

以上が、陶質土器・盃の各地域における動態である。これらを総合的にまとめておきたい。基本的に、各地域ともA類が先行し、B類が出現するのは、釜山・慶州では5世紀前半である。また、A類は、5世紀には数量的には減少傾向にあり、反面、B類が増加傾向を示し、盃の出土例の大半を占める時期は、6世紀前半に比定できる。

### 3. 陶質土器と須恵器の接点としての大庭寺・伏尾遺跡出土例の評価

陶邑古窯址群内で最も古く位置付けられる大庭寺・伏尾遺跡では、型式学的な見地からTK73併行期以前に既に操業が開始されていることが推定されており、TK208以後に及ぶ時期まで継続して、須恵器生産が行なわれていることが確認されている。この大庭寺・伏尾遺跡から出土した椀の型式を陶質土器・盃と比較した場合、4世紀代に多く見られ、5世紀代に減少傾向を示すA類の系譜を引く椀は、図示された資料全体の僅かな比率に過ぎない。また、5世紀に増加傾向を示し、6世紀に盛行するB類の系譜を引く椀は、ほとんど見られないのが現状である。現在、TG232併行期からTK73併行期の時期設定は、



第2図 陶邑古窯址群・椀集成図

1~6. 野々井西遺跡

7~12. 大庭寺遺跡

13~18. 伏尾遺跡

概ね5世紀前半とする見解があるが、盃のB類が、A類に代わって量産される段階以前の状況を反映していると考えられる。また、大庭寺・伏尾遺跡で出土している椀の大半は、盃のC・D類の系譜を引く特徴を有しており、椀の成立に関して言えば、釜山～金海周辺地域と密接な関連を想定せざるを得ないのが現状である。

大庭寺・伏尾遺跡出土のTK73移行期以前の椀は、陶質土器と比較した場合、把手上端にわらび手状突起が付く個体が多いことや、波状文によって器表面を加飾することなどから大きなヒアタスを認めざるを得ない。このことは、大庭寺・伏尾遺跡で出土する土器よりも更にさかのぼる土器を焼成する窯が、周辺地域に存在している可能性を示唆している。

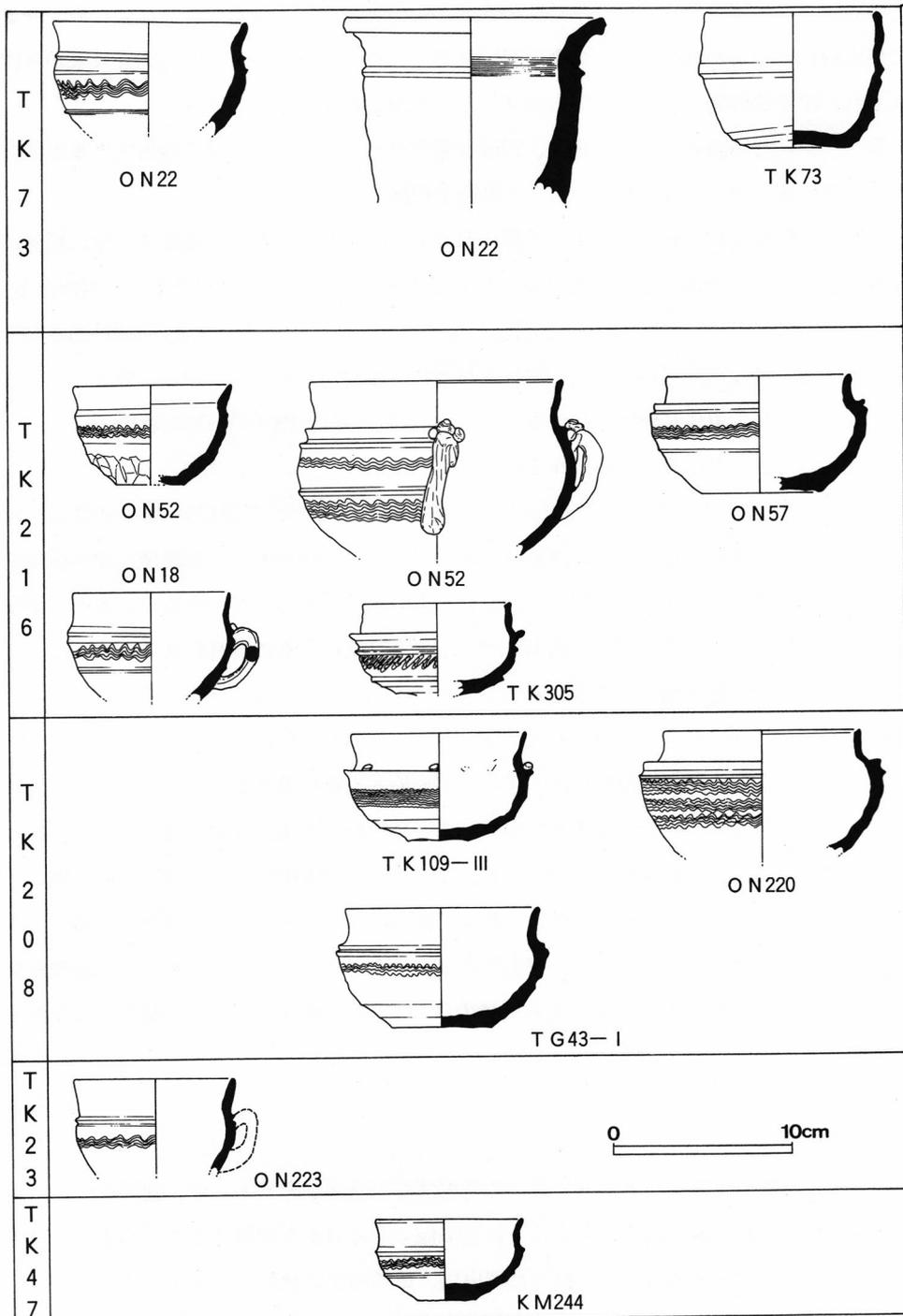
今までTK73併行期の土器群は、その器種や器形から、直接陶質土器とは結び付かないことが推論されてきたが、大庭寺・伏尾遺跡からの出土例は、僅かではあるが、その断絶期を短縮できる型式的特徴を有していると言える。

大庭寺・伏尾遺跡出土資料には、陶質土器・盃のA類の系譜を引く型式が見られるものの、TK73併行期からTK47併行期に至るまでの椀には、見られないことから、少なくともTK73段階には、盃の器形的特徴はうすれ、「須恵器・椀」としての独自性が始まると考えて良い状況である。では、TK73併行期以前の椀の特徴について、次の2篇の論考を概観しておきたい。

一連の大庭寺遺跡の初期須恵器を整理し、型式的検討を加えた岡戸哲紀<sup>(注15)</sup>は、従前の最古型式であったTK73をⅡ期として捉えた。そしてそれより先行するⅠ期として所謂、大庭寺型式からTK73以前の段階を示し、その中にTG231・TG232・393-O Lが属することを論じた。一方、岡戸が時期区分したⅠ期においても、櫛描文が施された蓋が、TG232からTG231へと変化することを野々井西遺跡・ON231号窯跡の報告書<sup>(注16)</sup>で論じている。それらの基本作業を中心に椀の動態を考えれば、先ず、Ⅰ期では、平らな底部から概ね直線的に外方へのびる体部及び口縁部をもつ個体が大半を占める。この形態的特徴は、陶質土器・盃のA類に類似しており、A類の中にあってもA1類に類似する個体が大半を占めている。しかし、TG232からTG231へと蓋の変化が論じられる程、椀における変化は抽出できないのが現状である。

一方、Ⅱ期では、Ⅰ期のようにA類に類似する個体は減少し、球体を呈する胴部をもつ形態的特徴を抽出することができる。

そのことからⅠ期とⅡ期の椀の型式は、現時点では連続性はなく、型式的なヒアタスを認めざるを得ないのが現状である。



第3図 TK73~TK47併行期 陶邑古窯址群・椀集成図(陶邑古窯址群報告書に拠る)  
 ON. 大野池地区 TK. 高蔵寺地区 TG. 梅地区 KM. 光明池地区

#### 4. 須恵器・椀の生産段階における出土資料の概観

須恵器・椀の編年的研究は、椀自体の形態が時期毎に変化することが少ないため、今まで個別には行なわれなかったのが実状である。しかし、陶邑古窯址群の調査成果から作成された編年的研究により、一応の組列として把握されるに至っている。

陶邑古窯址群の調査成果は、現在、正確な報告がなされており、須恵器研究の基本と言える。その成果から、特に椀についての動態を把握しておきたい。

大庭寺・伏尾遺跡を除く陶邑古窯址群において、把手の付く椀は、高蔵73号窯に類例が見られる。また、所謂、TK73併行期に比定できる資料に、大野池22号窯出土例がある。次に、TK216併行期に比定できる資料として、大野池18・52・57号窯及び高蔵305号窯出土例がある。TK73併行期に比べ、波状文などによる加飾が増加しており、底部はヘラ削りにより調整する個体が依然として多い。この段階における把手の形態の特徴として、既に形骸化した把手の出現も認められる。

TK208併行期としては、大野池220号窯、梅池43-I号窯、高蔵109-III号窯に出土例がある。椀の生産量において、当該段階は最も多いとの指摘がある。前段階に比べ全体的なシャープさはなく、底部は、回転ヘラ削りによる調整がその大半を占める。また、小型化の傾向が見られる。次のTK23併行期では、大野池233号窯に類例を見ることができ、口縁端部や頸部屈曲部の調整は前段階にも増してにおく、更に小型化が進んでいる。TK47併行期に比定できる資料として、KM244号窯出土例をあげることができるが、椀の形態から見ると前段階の型式とは、明らかな形態差を見い出せないのが現状である。基本的にTK47以後の椀の製作は極めて少ないことを指摘できる。なお、陶邑古窯址群において、棒状把手の付く鉢が梅68号窯から出土しており、時期的には、TK209併行期に出現することが確認されている。しかし、器高が極端に高いことと、それ以前の系譜を引く類例が確認されていないことから、把手付鉢は、別系譜上に位置づけられるとの認識をもった。そのため、器形が椀に酷似するもののTK209まで椀は、継続して製作されなかったと考えておきたい。この鉢については、別に稿を起こしたいと思う。

#### 5. まとめ

朝鮮半島の陶質土器は、各地域における発掘調査の粗密などもあって、細分化された型式分類と編年案が、各地域とどのような併行関係にあるのかを理解することが非常に困難な状況にある。盃を主体的に取り扱った理由は、比較的広い地域に出土することから地域性を抽出することにあつた。結果的には、A類からB類へ徐々に移行することが理解できた。

一方、須恵器・椀の製作開始期及びそれ以後の変遷については、大阪府・陶邑古窯址群

内より良好な資料群の増加が見られる。特に、陶邑古窯址群内で発見された大庭寺・伏尾・野々井遺跡(窯址)出土資料群は、従来、最古型式として認識されていた高蔵73号窯出土資料群より先行する型式の特徴を有していることが、判明した。これらの資料群の認識は、陶質土器と所謂、TK73併行期の一群の間を埋めることができる資料群である。反面、直接的に結び付く可能性は極めて少ないことも念頭におく必要がある。おそらく、TG231・TG232・393-OLよりも先行する型式の特徴をもつ資料群が周辺地域に存在すると推定される。

一方、岡戸哲紀が認識したI期においてもTG232(併行期)からTG231(併行期)へと変化することが考えられており、更に、型式的な細分化が可能な状況である。これらの研究により須恵器導入期の状況が、明確にされた意義は大きく、従来から認識されてきた「初期須恵器」「古式須恵器」の概念を大幅に変更する必要性が生じている。また、年代観の検討及び布留式土器との共伴関係など、総合的に解決すべき課題及び問題を提起する契機となったことは、極めて重要な成果である。

従来、TG232及びTG231検出以前は、少なくともTK73併行期よりも古い型式の特徴を有している点をもって「陶質土器」として検討されてきたが、朝鮮半島から直接、持ち込まれた陶質土器は、今まで考えてきた以上に少ない可能性が指摘できる。また、初源期の須恵器生産の中心は、甕などの大型・中型製品が中心であった可能性が高く、椀などの小型製品は、未検出ではあるが、初源期の窯址出土資料群よりは、おくれて生産されたことが考えられる。拙稿では、その時期に併行する型式としてTG231・TG232出土資料群を認識しておきたい。

一方、TK73併行期以後の椀は、TK208併行期にピークに達しており、減少傾向にありながらもTK47併行期前後まで生産されることが判明している。おそらく、椀の生産が減少傾向を示す要因として、生産様式の変化や葬送に関する儀礼の変化などが考えられる。今後は、消費地における動態を検討すれば、更に、椀のもつ意味や用途などがあきらかになるであろう。消費地における椀の動態については、別に稿を起す予定である。

最後に、本稿作成にあたり、陶邑、大庭寺・伏尾遺跡の報告書を作成された関係者の方々に敬意を表するとともに、前理事長・故福山敏男先生に本稿をささげたい。

(こいけ・ひろし=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注1 陶邑古窯址群の報告書については、平安考古学クラブ、大阪府文化財センターなどの機関から刊行されている。須恵器研究では、最も基本的な報告書群であり、巻数等は割愛させて頂く。

注2 小池 寛「陶質土器・皿に関する基礎研究」(『古墳文化とその伝統』西谷真治先生古希記念

論文集) 勉誠社 1995

- 注3 定森秀夫・禹順姫・朴天秀・朴光烈・朴廣春・宋桂鉉・安在皓・李盛周・崔秉鉉の一連の土器研究がある。個々の論考については、注2記載の文献を参照されたい。
- 注4 昌原大学博物館「馬山縣洞遺跡」(『昌原大学博物館學術調査報告書』第三冊) 1985
- 注5 釜山大學博物館「釜山華明洞古墳群」(『釜山大學博物館遺蹟調査報告』第2輯) 1979
- 注6 釜山大學校博物館「東萊福泉洞古墳群第2次調査概要」 1989
- 注7 釜山大學校附属博物館『五倫台古墳群発掘報告書』 1973
- 注8 釜山大學校博物館「金海禮安里古墳群I」(『釜山大學校博物館遺蹟調査報告』第8輯) 1985
- 注9 慶尚大學校博物館「陝川玉田古墳群I」(『慶尚大學校博物館調査報告』第3輯) 1988
- 注10 嶺南大學校博物館「陝川苧浦古墳A発掘調査報告」(『學術調査報告』第8冊) 1987
- 注11 東亜大學校博物館「陝川倉里古墳群」(『古蹟調査報告書』第14冊) 1987
- 注12 韓國文化財普及協會『慶州地区古墳発掘調査報告書』 1976
- 注13 車勇杰「清州新鳳洞遺蹟発掘調査報告」(『韓國 支石基의 諸問題』韓國考古學會) 1990
- 注14 국립청주박물관「부안 죽막동 제사유적」(『'93제2회 일반인을 위한 문화학교』) 1993.9.22
- 注15 岡戸哲紀「揺籃期の陶器」(『文化財学論集』文化財学論集刊行会) 1994
- 注16 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協會「野々井西遺跡・ON231号窯跡」(『大阪府埋蔵文化財協會調査報告書』第86輯) 1994